

# 1 自己評価及び外部評価結果

## 【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0473100410		
法人名	社会福祉法人 涌谷町社会福祉協議会		
事業所名	グループホームゆうらいふ	ユニット名	あさひ
所在地	宮城県遠田郡涌谷町涌谷新下町裏192		
自己評価作成日	平成 21 年 10 月 1 日		

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	<a href="http://yell.hello-net.info/kouhyou/">http://yell.hello-net.info/kouhyou/</a>
----------	---

## 【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	NPO法人 介護の社会化を進める一万人市民委員会宮城県民の会		
所在地	宮城県仙台市宮城野区榴岡4-2-8 テルウェル仙台ビル2階		
訪問調査日	平成 21 年 10 月 21 日		

## 【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

高齢者福祉複合施設という特性と地域性もあり、民生委員や行政区長をはじめ、一般客の出入りがとても多く、単独のグループホームよりもその点が大変恵まれている。それらの利点を多様に活用し日々のケアに取り入れる事を意識しながら、子供達を含むボランティアや学生の実習等も積極的に受け入れ、幅広い年齢層に親しまれるホームを目指している。また、他事業所との事業など、人との交流の場が多いことから、認知症の方が地域で暮らしていけるよう家族を含めて理解して頂けるよう努め、高齢者施設だからと内にもったり、閉鎖的になる事が決まらずに常に意識しながら取り組みをしている。あくまでも出来ない事を問題にするのではなく、出来る可能性を最大限に生かしていく事を大切にして、入居者を中心として常に新しい取り組みを日々実践している。

## 【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

1. 本ホームは、「高齢者福祉複合施設」として特養老人ホーム等と併設して設置され、高齢者福祉の一翼を担って、一体的に運営されている。複合施設全体で、資質向上、感染対策、環境整備、衛生等の各委員会が組織され、ホーム職員もメンバーとして参加し、成果をサービスの質向上に活かし、町内福祉関係者が出席する毎年事例研究会でその成果を発表している。  
2. 管理者、介護主任、ユニット主任、職員がサービスの質向上に向け、課題を持って取り組んでいることが面談でうかがえた。例えば、管理者は「入居者、家族の満足度が高められるはず」と、毎月具体的な目標を掲げ、結果を評価し、ステップアップに職員と共に取り組んでいる。

## V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57 利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59 利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66 職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62 利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

2 自己評価および外部評価結果(詳細)(事業所名 **グループホーム ゆうらいふ** )「ユニット名 **あさひ** 」

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I. 理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	法人理念を基本とした上で、それらが一人歩きしないよう各ユニット毎に入居者の状態、季節、介護技術を加味しながら毎月の目標を掲げて取り組んでいる。また、毎月の目標を振り返り今後に活かす機会を打ち合わせ時など定期的に設けて、総合的な資質の向上に取り組むこととしている。	法人理念「誰もがその人らしく安心して暮らすことができる地域社会の実現」を実践すべく、入居者状況、地域ニーズ、季節等に合せて、ユニット毎に毎月の具体的な目標(例、9月はインフルエンザ予防)を定め取り組んでいる。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	法人施設の研修室を開放して実施している各種会議の帰りなどに入居者の知人が立ち寄りてくれたり、散歩や買い物時なども気軽に声を掛けてくれる方が近隣にとっても多く、意識せずとも自然とつながりが深くなっている。また、近隣の保育所の夕涼み会や地域の文化祭などにも積極的に参加している。また子供達の慰問や実習、ボランティアも活動に来てくれるなど、交流は比較的多く行っている。	隣接の保育所夕涼み会への参加、散歩交流、公民館で開催される文化祭への出品、参加、草取りへの参加等入居者が地域活動や住民との交流を行っている。法人が開催する夏祭りには、地域の方が参加し、入居者との交流を深めている。また、踊り、歌等でのボランティアや小学生の慰問等も行われている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	地域の勉強会や研修会等にも関わり、介護保険制度や各サービス形態について出前講座を行ったりして、事業所での実践内容と経験を踏まえながら認知ケアの啓発活動に努めている		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	事業所の最近の様子を含めた近況報告を行うのはもちろんだが、そのほかに参加メンバーからの要望や意見等についても引き出し双方向的に話し合い、課題が改善出来るよう前向きに検討し取り組んでいる。	入居者、家族、地域区長、役場職員、包括支援センター職員等10名で、年2回開催し、地域住民の防災訓練への協力等が得られている。回数増等により、サービス向上が期待できる。	地域の協力が得られやすい環境にあるので、民生委員、PTA、防災担当部署等メンバーを固定しないで声がけをして、2ヶ月毎に開催し、サービス向上を図って頂きたい。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	入居者の中には生活保護を受給している方や、事情があり町からの依頼等で入居している方がいる事もあり、不定期ではあるが時間があいた時には、町の職員等もお茶を飲みながら、様子を見に来てくれたりしている。その際にホームの状況報告も行うなどして連携をとっている。	涌谷町社協の施設で、町の担当者が訪れて、入居者状況の話し合い、入居相談等を頻繁に行っている。又、町からの依頼で近隣の方のインフルエンザ予防研修等も行っている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	入居者本位に努め、鍵やベットの柵の使用についても虐待につながるという認識を持つよう努め、ケアが短絡的にならないようにしている。	日中は、鍵をかけず、職員が入居者の外出傾向を共有化し、外出時には同行や見守りで対応している。また、高齢者の複合施設のため、他施設の職員や近隣の方の声がけ、見守り、連絡の協力が得られている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	職員間の中で、入居者の望まないケアは全て虐待にあたるという意識の統一を行っている。実質的な介護技術ケアはもちろんであるが、誘導方法や声掛け等の内面的なケアもひとつ間違えば虐待にあたるという意識を持ち取り組んでいる。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	認知症の進行や身寄りが無い等の事情がある方について、行政や各関係機関と連携し、成年後見人制度利用を勧めた経緯があり、職員間でも学ぶ良い機会となった。加えて各種研修会等で学び、現在も知識を得る努力をしている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	十分に時間をとり説明し、認知症ケアに対する考え方と取り組み、緊急時医療連携体制の実際と個人情報の取扱いなどについて十分に時間をとり説明し、同意を頂くようにしている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	特定の入居者の意見だけが反映されないよう機会を作って話題提供している。具体的には、入浴の時間など日常生活上の意思決定について担当者が把握し本人の思いを優先するようしたり、また、月に数日のメニューについては利用者の好みを聞き献立に取り入れて、入居者の満足度の向上に努めている。加えてサービスの質の向上の為には家族の意見が必要不可欠であるとの視点を大切にし、行事や訪問時等を含め家族に問いかけ、小さな意見でも言って頂けるような雰囲気作りに努めている。	運営推進会議に入居者とその家族が順番に出席するようにし、意見を伺っている。家族来訪時は各ユニットリーダーや職員が意見、要望等について面談しており、入居者の衣類購入での誤解を解決したとしている。夏祭りや特養ホームと合同で開催する敬老会等に家族も出席して頂き、意見、要望を伺う機会を設けている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	法人組織と年1回全職員の個別面談の機会を設けている他、毎月の打ち合わせ等でも職員の率直な意見を聞くよう心掛けている。	日々のミーティングの他、毎月開催する全体会議とユニット会議で、意見を聞く機会を設けている。業務日誌、夜間日誌等で職員からの記入し易い様式への改訂提案で改善を図る等、サービス向上へ向けて取り組んでいる。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	より高い能力水準へとスキルアップ出来る事を目的とし、今年度より人事考課制度の運営を開始した。各職種グレード別に取り組みと考課を実践し、やりがいを持って働ける職場環境を目指している。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	職員の資質に応じて段階的に法人内外の研修に参加できる体制をとっている。また、登録職員も必要に応じて研修・会議には参加する機会を確保している。さらに、法人全体で資質向上の委員会が組織化されており、年間の研修が計画・立案されている。個人々の能力や性格に合わせて管理者、主任はOJTを実施している。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	県内で多くのシェアを持つ協議会へ加入し、見学を含めた学習会や職員研修に参加している。他事業所の多角的な意見を取り入れ、経験を活かしながら質の向上を目指している。また、研修会へ参加した職員は必ず復命し、良い取り組み事例はすぐに現場へ還元するように努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>Ⅱ. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	相談があった際には、必ず本人に会って心身の状態や表情から読み取れる思いを確認し、本人と向き合う事が信頼関係を構築する第一歩だと考え取り組んでいる。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	何に困り、何が必要なのかゆっくりと時間をかけて聞く事で、信頼関係を築けるように対応している。その上で本人と家族が望むケアについて確認し事業所としてどのような対応が出来るのかを理解して頂く様になっている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	相談時に本人及び家族の思いや状況を確認し、必要に応じて他のサービスの利用調整や提案を行うなど、可能な限り柔軟な対応を行うようにしている。法人内で運営している独自サービスを契約利用してもらいながら顧客満足度の向上に努めている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	サービスを提供する側、される側の短絡的な意識を持たないようにした上で、共に支えあいながら生活をしていくという考えを職員が共有し、一人一人が役割活動を通して、主役になれるような場面作りに留意している。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	介護の専門職としての助言を含め、押し付けにならない程度で入居者の思いを情報提供する事で、家族に余裕が生まれ本来の結びつきが強くなってきている、		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	生活環境が極力変化しないように努め、入居前からの近隣の方との人間関係や生活習慣等を尊重し支援している。また協力して頂く方々にも認知症を理解して頂く様に働きかけている。	入居前に東京センター方式の基本、暮らし情報シートを使用し、人間、社会関係等を把握している。お花の先生をしていた方がお弟子さんの教室に出かける支援や行きつけ美容院に出かける支援等関係継続に努めている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用者が同士の関わり合い、支え合えるような支援に努めている	役割活動を通して入居者の同士の支えあいを引き出し、職員が調整役になるように支援しながら注意深く見守るようにしている。皆で行なう各種レクや手先を使う作業を通して一体感が生まれるよう配慮している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	入居者と共にお見舞いにいたりして関係を断ち切らないように留意している。また、過去に退去された方の家族様の中にはGHの環境が好きと、遊びにきてくれたりしている。気軽にお茶のみに来れる様な環境作りに努め関わりを大切にしている。		
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	日々の暮らしの中で本人の意向を読み取ろうと関わるようにするのはもちろん、認知症により訴え・要望は日々変化している事を伝え、本人を主体として考え何が良なのか家族を交え話あうようにしている。	東京センター方式の心身情報シートを使用し、思いや意向等の把握に努めている。日々のケース記録シートに、本人の言葉をそのまま書くようにする事で、日々の思い、意向がイメージでき、日々のケアを行っている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居前の訪問調査時の聞き取りを始め、入居後も本人や家族の言葉に耳を傾けながら、言葉遣いやプライバシーを考慮しながら情報の把握に努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	入居前からの習慣を含め、個人個人の生活習慣を尊重しながら、できないことよりできることへ注目し残存能力を維持していけるような支援と現状の把握を心掛けている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	入居者本人について、職員全員で状態把握が出来るように努めモニタリングやケア会議を行ないながら、その人らしさを引き出す介護計画を念頭に置き、それらに本人・家族の要望を取り入れ反映できるようにしている。	モニタリングで本人の言葉をそのまま記載する等、本人視点にたつてより良く暮らし続けるための課題とケアのあり方を毎月の会議で話し合っている。医師、家族の意見も聞き、少なくとも6ヶ月毎に計画見直しを行っている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	入居者の日常生活上での心身的な状態変化、気づきはもちろん、水分・食事量、排泄面など個別に必要な情報も、個別のケア記録に記入している。また、毎日ケアカンファレンスを行ない、全入居者の状態を把握した上で全職員が確認できるようにして情報の共有を徹底している。様々な気づきを記入する為のゆうらいふシートを活用し、情報の収集に努めている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々にも生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	医療連携体制を強化し日常的な健康管理を行い、本人及び家族の負担となる受診・入院の回避を行うよう努めている。また、定期的な通院や受診などの必要な支援もある程度柔軟に対応している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	入居者が住みなれた地域で安心して暮らしていけるように、地域の民生委員や行政区長、近隣の子供達、ボランティア等にも働きかけ協力を頂きながら支援している。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	事業所の協力病院の他、本人や家族が希望するかかりつけ医を基本的に家族対応で受診している。その際も、文書にて医師へ生活の様子を報告書を提出し、指示を頂きながら情報伝達を蜜にして信頼関係を築いている。定期的に皮膚科の訪問診察もあり、必要に応じて利用している。	本人が希望するかかりつけ医に家族が同行受診する事を基本に、ホームが作成した生活状況や血圧値等の報告書を持参し、医師から診療状況報告書が頂ける信頼関係が出来ている。週1回皮膚科訪問診察も利用できる。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	同一法人内の看護師を配置し、日常的に入居者の健康管理や必要に応じた援助を行っている。介護職員とも気軽に相談できる体制が確保されている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院を含む環境の変化を最小限に抑えるべく、本人及び家族の意向を確認し医療機関とも情報交換しながら速やかな退院支援が出来るよう支援している。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	事業所として対応が出来る段階の指針を定め説明を行っている。また、対応が可能な最大限のケアについての方針を職員間で検討し、意識の向上と援助方法の統一を図っている。	重度化や終末期のホーム側の方針、対応について、入居時に、ホームとして対応が出来る段階について説明し、入居者、家族の同意を得ている。法人として組織している資質向上委員会が行っている勉強会に参加し、対応、援助技術の統一化を図っている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	消防署の協力を頂くなどして定期的に研修会を実施し救命救急法の技術向上に努めている。急変や事故発生時に応じてのマニュアルを作成している。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年に数回災害を想定した実践的な訓練を実施している。また、地域にも運営推進会議などで広く協力を頂ける様に働きかけている。同一法人内で災害時、携帯電話への一斉通信や災害マニュアルがある。	年2回消防署立会いで総合訓練を行っている。1回は、夜間想定避難訓練を行っている。地域協力が得られてきており、11月に地域防災協力員が参加する防災訓練を行う予定である。非常用食糧等も準備している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	入居者ひとりひとりの誇りやプライバシーに配慮しつつ、声掛けや援助について日常的に確認するよう取り組んでいる。情報の個性や守秘義務をスタッフ間にて十分に理解し、書類等を取り扱っている。	一人ひとりの状況を引継ぎノートに記載し、共有化し、日々変化する入居者への言葉かけ、かかわりの仕方等を工夫し、本人の自己決定を尊重した支援に取り組んでいることが職員面談でうかがえた。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	感情の意思表出が困難な入居者に対しても時間を多くして関わる事や、複数の選択肢を設けて入居者が自由に選ぶ事ができる環境と共に選びやすく、答え易い声掛け等配慮している。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	その日の入居者の体調、ペースなどを尊重しそれぞれが自己決定した上で主役になれる場面づくりを心掛け柔軟に対応している。しかし、入浴、行事等スタッフの都合で決めてある事も少なくはない。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	まず楽しんで頂く事を前提として、服装はもちろん化粧やマニキュアなど本人の好みを尊重し職員はその出来ない所を必要な時に手伝い支援するようにしている。理美容についても本人のこだわりを大切にしつつ支援している。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	ホームで作った野菜と一緒に採りに行って調理したり、嚥下の面で食べられない食材を食べられるように工夫したりして視覚的にも満足して頂けるように配慮している。また、日々の献立と一緒に相談して考える他、月に数回リクエストメニューを導入し楽しんで食べて頂く事に重点を置いている。スタッフと入居者が同じテーブルを囲んで楽しく食事できるよう雰囲気づくりにも気を配っている。	入居者と職員が同じ食卓を囲み同じものを食し、入居者は表情が穏やかで、会話しながら食事を楽しんでいた。職員は口元をめぐう等さりげないサポートを行っていた。準備、食事後の片付け、洗い、拭き等が役割が自ずと決まり、職員は感謝の言葉かけを行っていた。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	個々の食事・水分量を記録につけ把握する事はもちろん、写真を記録するなどして職員間で情報を共有している。毎月のメニューも定期的に管理栄養士に確認して頂き専門的な見地からアドバイスをもらっている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後の歯磨きの声掛けを行い、困難な方には本人が持っている残存能力を活用しながら支援を行っている。また、法人で歯科医院と契約し定期健診を実施するなどして口腔内の生活保持に向けて取り組んでいる。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	個々の排泄パターンを把握し、随時誘導しながら本人のシグナルを見落とさないように心掛けて支援している。また、皮膚トラブルも考慮しオムツを使用している方について、出来る限り外しながらパンツへと移行できるよう援助している。	個々人の排泄状況を記録し、排泄パターン把握に努め、シグナルを見落とさないよう心掛け、日中はトイレでの排泄ができるよう支援している。職員から家族に提案し、ウエットティッシュの使用で、ただれが治った例がある。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	毎日乳製品や繊維質の多い食材を取り入れたり、体を動かす機会を適度に設けるなどして便秘の予防に取り組む。あくまでも自然排便ができる環境を目指している。職員間ではすぐに薬を使用したりするなど短絡的な方法をとらないよう意識の統一を図り、本人のサインを注意深く見守っている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	入浴を拒む方に対しても十分に時間をかけて関わったり、チームプレイで対応を工夫するなどして、それぞれの入居者の希望を優先しながら安全な入浴支援を実施している。ADLが重度化してきつた入居者様に対しても、体調を考慮した上で、2人介助での入浴対応を実施し安全面に配慮している。	希望を聞き、個別に合った入浴が毎日出来るよう支援し、夜間入浴も対応可能としている。入浴を拒む方には、担当職員を充てたり、タイミングを見ながら、チームプレイでの対応を行っている。浴場は2人介助可能な造りである。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	日中の活動になるべく幅を持たせて生活リズムを整えた上で、夕方からは穏やかな時間を過ごし安眠が出来るように促している。寝付けない方には一緒に話をしたり、飲み物を提供するなどゆったりとした時間提供にも配慮している。また、開所当時からの方針で眠剤を服用している方も出来る限り減らしていく事を心掛け職員間で統一している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	処方箋を個々のケース記録に整理し、内服の内容や副作用について職員が把握できるようにしている。追加薬があった時や不明な点はそのままにせず必ず看護師と相談する等して本人の状態変化にあわせて対応が出来るようにして連携を強めている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	季節に応じた仕事や年間の行事を通じて、それぞれの入居者様に得意分野での経験や知識を活かしながら活躍する場面設定を多く設けるようにしてコミュニケーションを図りながら実践している。またそれらを終えた際には必ず感謝の言葉を口に出して言うように心掛け直接伝わる反応を確認し今後活かすようにしている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	一人一人の要望に応じて外気に触れ気分転換を図る意味で、日常的に買い物やドライブなどの個別外出を実施している。時に大勢での外出も良い刺激となり得る為、その時々状況に応じて出掛けている。	担当職員が個別に希望を聞き、自宅、墓参り、菓子店等への外出を行っており、ホーム内とは異なる入居者の喜びや表情を見たり、会話ができる等で職員も喜びを感じている。車椅子の方も近くの城山へのお花見等で、極力戸外へ出かけるよう支援している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	入居者の中には、家族の理解のもと小額ではあるがお金を所持している方もいる。社会生活とお金のつながりの中において、過去の記憶を呼び覚ます効果もある為、良い刺激の提供という意味においてトラブルにつながらないように気をつけながら見守りしている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	本人の意向を尊重しつつ代筆や電話の交換を行い随時支援している。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	一人一人が居心地よく過ごせるように季節に応じた飾り付けを入居者と共に作成している。視覚をはじめ五感などの感覚的にも適度な刺激と生活感を組み込みながら日常的に暮らしの場を整えている。	食堂兼共同生活室は照明がまぶしくないようフードを設けている。壁面に、入居者が作成した折り紙や習字等が飾り付けられ、季節感や親しみのある家庭感が感じられる。畳敷きの室、廊下に一休みできるソファの設置で、居心地良く過ごせよう工夫している。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	ホームの中にある程度死角になるちょっとしたスペースを設け、独りになることでほっとするような居心地の良い居場所を確保している。その際に職員が必要以上に介入しすぎないように気をつけ、入居者のストレスの緩和に配慮している		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	移り住みなど環境の変化による不安や影響を最小限に抑えるため、入居時は特に馴染みの物を持参して頂くように本人や家族に働きかけている。家具の配置にも気を配り住み慣れた自宅の部屋の縮図に近づくように心掛けている。	箆笥、ペット、ソファ、記念写真、人形等、入居者が使いなれた家具や馴染みのものが持ち込まれ、家族とも相談しながら配置を工夫している。居室の表札も思い思いに作られている。加湿器も使用している。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	できるできない事を見極め、対象の入居者について職員間で何度も検討し、可能な限り出来る状態に引き戻せるよう取り組んでいる。本人の混乱や失敗を考慮しつつ、まずやってみる気持ちを大切にしている。		

### 1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0473100410		
法人名	社会福祉法人 涌谷町社会福祉協議会		
事業所名	グループホームゆうらいふ	ユニット名	ゆうひ
所在地	宮城県遠田郡涌谷町涌谷新下町裏192		
自己評価作成日	平成21年	10月	1日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

高齢者福祉複合施設という特性と地域性もあり、民生委員や行政区長をはじめ、一般客の出入りがとても多く、単独のグループホームよりもその点が大変恵まれている。それらの利点を多様に活用し日々のケアに取り入れる事を意識しながら、子供達を含むボランティアや学生の実習等も積極的に受け入れ、幅広い年齢層に親しまれるホームを目指している。また、他事業所との事業など、人との交流の場が多いことから、認知症の方が地域で暮らしていけるよう家族を含めて理解して頂けるよう努め、高齢者施設だからと内にもったり、閉鎖的になる事が決まらずに常に意識しながら取り組みをしている。あくまでも出来ない事を問題にするのではなく、出来る可能性を最大限に生かしていく事を大切にして、入居者を中心として常に新しい取り組みを日々実践している。

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	<a href="http://yell.hello-net.info/kouhyou/">http://yell.hello-net.info/kouhyou/</a>
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	NPO法人 介護の社会化を進める一万人市民委員会宮城県民の会		
所在地	宮城県仙台市宮城野区榴岡4-2-8 テルウェル仙台ビル2階		
訪問調査日	平成21年	10月	21日

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

1. 本ホームは、「高齢者福祉複合施設」として特養老人ホーム等と併設して設置され、高齢者福祉の一翼を担って、一体的に運営されている。複合施設全体で、資質向上、感染対策、環境整備、衛生等の各委員会が組織され、ホーム職員もメンバーとして参加し、成果をサービスの質向上に活かし、町内福祉関係者が出席する毎年事例研究会でその成果を発表している。  
2. 管理者、介護主任、ユニット主任、職員がサービスの質向上に向け、課題を持って取り組んでいることが面談でうかがえた。例えば、管理者は「入居者、家族の満足度がもっと高められるはず」と、毎月具体的な目標を掲げ、結果を評価し、ステップアップに職員と共に取り組んでいる。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57 利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59 利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66 職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62 利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

2 自己評価および外部評価結果(詳細)(事業所名 **グループホーム ゆうらいふ** )「ユニット名 **ゆうひ** 」

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I. 理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	法人理念を基本とした上で、それらが一人歩きしないよう各ユニット毎に入居者の状態、季節、介護技術を加味しながら毎月の目標を掲げて取り組んでいる。また、毎月の目標を振り返り今後活かす機会を打ち合わせ時など定期的に設けて、総合的な資質の向上に取り組むこととしている。	法人理念「誰もがその人らしく安心して暮らすことができる地域社会の実現」を実践すべく、入居者状況、地域ニーズ、季節等に合せて、ユニット毎に毎月の具体的な目標(例、9月はインフルエンザ予防)を定め取り組んでいる。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	法人施設の研修室を開放して実施している各種会議の帰りなどに入居者の知人が立ち寄ってくれたり、散歩や買い物時なども気軽に声を掛けてくれる方が近隣にとっても多く、意識せずとも自然とつながりが深くなっている。また、近隣の保育所の夕涼み会や地域の文化祭などにも積極的に参加している。また子供達の慰問や実習、ボランティアも活動に来てくれるなど、交流は比較的多く行っている。	隣接の保育所夕涼み会への参加、散歩交流、公民館で開催される文化祭への出品、参加、草取りへの参加等入居者が地域活動や住民との交流を行っている。法人が開催する夏祭りには、地域の方が参加し、入居者との交流を深めている。また、踊り、歌等でのボランティアや小学生の慰問等も行われている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	地域の勉強会や研修会等にも関わり、介護保険制度や各サービス形態について出前講座を行ったりして、事業所での実践内容と経験を踏まえながら認知ケアの啓発活動に努めている		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	事業所の最近の様子を含めた近況報告を行うのはもちろんだが、そのほかに参加メンバーからの要望や意見等についても引き出し双方向的に話し合い、課題が改善出来るよう前向きに検討し取り組んでいる。	入居者、家族、地域区長、役場職員、包括支援センター職員等10名で、年2回開催し、地域住民の防災訓練への協力等が得られている。回数増等により、サービス向上が期待できる。	地域の協力が得られやすい環境にあるので、民生委員、PTA、防災担当部署等メンバーを固定しないで声がけをして、2ヶ月毎に開催し、サービス向上を図って頂きたい。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	入居者の中には生活保護を受給している方や、事情があり町からの依頼等で入居している方がいる事もあり、不定期ではあるが時間があいた時には、町の職員等もお茶を飲みながら、様子を見に来てくれたりしている。その際にホームの状況報告も行うなどして連携をとっている。	涌谷町社協の施設で、町の担当者が訪れて、入居者状況の話し合い、入居相談等を頻繁に行っている。又、町からの依頼で近隣の方のインフルエンザ予防研修等も行っている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	入居者本位に努め、鍵やベットの使用についても虐待につながるという認識を持つよう努め、ケアが短絡的にならないようにしている。	日中は、鍵をかけず、職員が入居者の外出傾向を共有化し、外出時には同行や見守りで対応している。また、高齢者の複合施設のため、他施設の職員や近隣の方の声がけ、見守り、連絡の協力が得られている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	職員間の中で、入居者の望まないケアは全て虐待にあたるという意識の統一を行っている。実質的な介護技術ケアはもちろんであるが、誘導方法や声掛け等の内面的なケアもひとつ間違えば虐待にあたるという意識を持ち取り組んでいる。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	認知症の進行や身寄りが無い等の事情がある方について、行政や各関係機関と連携し、成年後見人制度利用を勧めた経緯があり、職員間でも学ぶ良い機会となった。加えて各種研修会等で学び、現在も知識を得る努力をしている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	十分に時間をとり説明し、認知症ケアに対する考え方と取り組み、緊急時医療連携体制の実際と個人情報の取扱いなどについて十分に時間をとり説明し、同意を頂くようにしている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	特定の入居者の意見だけが反映されないよう機会を作って話題提供している。具体的には、入浴の時間など日常生活上の意思決定について担当者が把握し本人の思いを優先するようしたり、また、月に数日のメニューについては利用者の好みを聞き献立に取り入れて、入居者の満足度の向上に努めている。加えてサービスの質の向上の為には家族の意見が必要不可欠であるとの視点を大切にし、行事や訪問時等を含め家族に問いかけ、小さな意見でも言って頂けるような雰囲気作りに努めている。	運営推進会議に入居者とその家族が順番に出席するようにし、意見を伺っている。家族来訪時は各ユニットリーダーや職員が意見、要望等について面談しており、入居者の衣類購入での誤解を解決したとしている。夏祭りや特養ホームと合同で開催する敬老会等に家族も出席して頂き、意見、要望を伺う機会を設けている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	日々のカンファレンスの時間帯や、毎月の打ち合わせ等でも職員の率直な意見を聞くよう心掛けている。	日々のミーティングの他、毎月開催する全体会議とユニット会議で、意見を聞く機会を設けている。業務日誌、夜間日誌等で職員からの記入し易い様式への改訂提案で改善を図る等、サービス向上へ向けて取り組んでいる。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	より高い能力水準へとスキルアップ出来る事を目的とし、今年度より人事考課制度の運営を開始した。各職種グレード別に取り組みと考課を実践し、やりがいを持って働ける職場環境を目指している。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	職員の資質に応じて段階的に法人内外の研修に参加できる体制をとっている。また、登録職員も必要に応じて研修・会議には参加する機会を確保している。さらに、法人全体で資質向上の委員会が組織化されており、年間の研修が計画・立案されている。個人々の能力や性格に合わせて管理者、主任はOJTを実施している。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	県内で多くのシェアを持つ協議会へ加入し、見学を含めた学習会や職員研修に参加している。他事業所の多角的な意見を取り入れ、経験を活かしながら質の向上を目指している。また、研修会へ参加した職員は必ず復命し、良い取り組み事例はすぐに現場へ還元するように努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>Ⅱ. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	相談があった際には、必ず本人に会って心身の状態や表情から読み取れる思いを確認し、本人と向き合う事が信頼関係を構築する第一歩だと考え取り組んでいる。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	何に困り、何が必要なのかゆっくりと時間をかけて聞く事で、信頼関係を築けるように対応している。その上で本人と家族が望むケアについて確認し事業所としてどのような対応が出来るのかを理解して頂く様になっている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	相談時に本人及び家族の思いや状況を確認し、必要に応じて他のサービスの利用調整や提案を行うなど、可能な限り柔軟な対応を行うようにしている。法人内で運営している独自サービスを契約利用してもらいながら顧客満足度の向上に努めている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	サービスを提供する側、される側の短絡的な意識を持たないようにした上で、共に支えあいながら生活をしていくという考えを職員が共有し、一人一人が役割活動を通して、主役になれるような場面作りに留意している。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	介護の専門職としての助言を含め、押し付けにならない程度で入居者の思いを情報提供する事で、家族に余裕が生まれ本来の結びつきが強くなってきている、		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	入居前と環境が極力変化しないように努め、生け花教室にも参加して頂くといった昔からの生活習慣を尊重している。また協力して頂く方々にも認知症を理解して頂く様に働きかけている。	入居前に東京センター方式の基本、暮らし情報シートを使用し、人間、社会関係等を把握している。お花の先生をしていた方がお弟子さんの教室に出かける支援や行きつけ美容院に出かける支援等関係継続に努めている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用者が同士の関わり合い、支え合えるような支援に努めている	役割活動を通して入居者の同士の支えあいを引き出し、職員が調整役になるように支援しながら注意深く見守るようにしている。皆で行なう各種レクや手先を使う作業を通して一体感が生まれるよう配慮している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	入居者と共にお見舞いにいたりして関係を断ち切らないように留意している。また、過去に退去された方の家族様の中にはGHの環境が好きと、遊びにきてくれたりしている。気軽にお茶のみに来れる様な環境作りに努め関わりを大切にしている。		
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	日々の暮らしの中で本人の意向を読み取ろうと関わるようにするのはもちろん、認知症により訴え・要望は日々変化している事を伝え、本人を主体として考え何が良なのか家族を交え話あうようにしている。	東京センター方式の心身情報シートを使用し、思いや意向等の把握に努めている。日々のケース記録シートに、本人の言葉をそのまま書くようにする事で、日々の思い、意向がイメージでき、日々のケアを行っている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居前の訪問調査時の聞き取りを始め、入居後も本人や家族の言葉に耳を傾けながら、言葉遣いやプライバシーを考慮しながら情報の把握に努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	朝晩の読経など入居前からの習慣を含め、個人個人の生活習慣を尊重し、残存能力を維持していけるような支援を心掛けている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	入居者本人について、職員全員で状態把握が出来るように努めモニタリングやケア会議を行ないながら、その人らしさを引き出す介護計画を念頭に置き、それらに本人・家族の要望を取り入れ反映できるようにしている。	モニタリングで本人の言葉をそのまま記載する等、本人視点にたつてより良く暮らし続けるための課題とケアのあり方を毎月の会議で話し合っている。医師、家族の意見も聞き、少なくとも6ヶ月毎に計画見直しを行っている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	入居者の日常生活上での心身的な状態変化、気づきはもちろん、水分・食事量、排泄面など個別に必要な情報も、個別のケア記録に記入している。また、毎日ケアカンファレンスを行ない、全入居者の状態を把握した上で全職員が確認できるようにして情報の共有を徹底している。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々にも生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	医療連携体制を強化し日常的な健康管理を行い、本人及び家族の負担となる受診・入院の回避を行うよう努めている。また、定期的な通院や受診などの必要な支援もある程度柔軟に対応している。		

自己	外部	項目	外部評価	
			自己評価 実践状況	実践状況 次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	入居者が住みなれた地域で安心して暮らしていけるように、地域の民生委員や行政区長、近隣の子供達、ボランティア等にも働きかけ協力を頂きながら支援している。	
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	事業所の協力病院の他、本人や家族が希望するかかりつけ医を基本的に家族対応で受診している。その際も、文書にて医師へ生活の様子の報告書を提出し、指示を頂きながら情報伝達を蜜にして信頼関係を築き、適切な医療を行なえるようサポートしている。最近では、皮膚科の往診体制も開始している。	本人が希望するかかりつけ医に家族が同行受診する事を基本に、ホームが作成した生活状況や血圧値等の報告書を持参し、医師から診療状況報告書が頂ける信頼関係が出来ている。週1回皮膚科訪問診察も利用できる。
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	同一法人内の看護師を配置し、日常的に入居者の健康管理や必要に応じた援助を行っている。介護職員とも気軽に相談できる体制が確保されている。	
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院を含む環境の変化を最小限に抑えるべく、本人及び家族の意向を確認し医療機関とも情報交換しながら速やかな退院支援が出来るよう支援している。	
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	事業所として対応が出来る段階の指針を定め説明を行っている。また、対応が可能な最大限のケアについての方針を職員間で検討し、意識の向上と援助方法の統一を図っている。	重度化や終末期のホーム側の方針、対応について、入居時に、ホームとして対応が出来る段階について説明し、入居者、家族の同意を得ている。法人として組織している資質向上委員会が行っている勉強会に参加し、対応、援助技術の統一化を図っている。
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	消防署の協力を頂くなどして定期的に研修会を実施し救命救急法の技術向上に努めている。	
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年に数回災害を想定した実践的な訓練を実施している。その他にも、運営推進会議などでも働きかけている事をはじめ、地域の方々にも広く協力を頂ける様な体制作りを努めている。訓練と甘んじる事無く、有事に対応できる体制強化を目指している。	年2回消防署立会いで総合訓練を行っている。1回は、夜間想定避難訓練を行っている。地域協力が得られてきており、11月に地域防災協力員が参加する防災訓練を行う予定である。非常用食糧等も準備している。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	入居者ひとりひとりの誇りやプライバシーに配慮しつつ、声掛けや援助について日常的に確認するように取り組んでいる。	一人ひとりの状況を引継ぎノートに記載し、共有化し、日々変化する入居者への言葉かけ、かかわりの仕方等を工夫し、本人の自己決定を尊重した支援に取り組んでいることが職員面談でうかがえた。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	感情の意思表示が困難な入居者に対しても時間を多くして関わる事や、本人の思いと言葉を最大限に引き出す事に留意している。また、複数の選択肢を設けて入居者が自由に選ぶ事ができる環境に配慮している。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	その日の入居者の体調、ペースなどを尊重しそれぞれが自己決定した上で主役になれる場面づくりを心掛け柔軟に対応している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	まず楽しんで頂く事を前提として、服装はもちろん化粧やマニキュアなど本人の好みを尊重し職員はその出来ない所を必要な時に手伝い支援するようにしている。理美容についても本人のこだわりを大切にしつつ支援している。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	ホームで作った野菜と一緒に採りに行って調理したり、嚥下の面で食べられない食材を食べられるように工夫したりして視覚的にも満足して頂けるように配慮している。また、日々の献立と一緒に相談して考える他、月に数回リクエストメニューを導入し楽しんで食べて頂く事に重点を置いている。	入居者と職員が同じ食卓を囲み同じものを食し、入居者は表情が穏やかで、会話しながら食事を楽しんでいた。職員は口元をめぐう等さりげないサポートを行っていた。準備、食事後の片付け、洗い、拭き等が役割が自ずと決まり、職員は感謝の言葉かけを行っていた。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	個々の食事・水分量を記録につけ把握する事はもちろん、写真を記録するなどして職員間で情報を共有している。毎月のメニューも定期的に管理栄養士に確認して頂き専門的な見地からアドバイスをもらっている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後の歯磨きの声掛けを行い、困難な方には本人が持っている残存能力を活用しながら支援を行っている。また、法人で歯科医院と契約し定期健診を実施するなどして口腔内の生活保持に向けて取り組んでいる。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	個々の排泄パターンを把握し、随時誘導しながら本人のシグナルを見落とさないように心掛けて支援している。また、皮膚トラブルも考慮しオムツを使用している方について、出来る限り外しながら普通の布パンツへと移行できるよう援助している。	個々人の排泄状況を記録し、排泄パターン把握に努め、シグナルを見落とさないよう心掛け、日中はトイレでの排泄ができるよう支援している。職員から家族に提案し、ウエットティッシュの使用で、ただれが治った例がある。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	毎日乳製品や繊維質の多い食材を取り入れたり、マッサージや体を動かす機会を適度に設けるなどして便秘の予防に取り組み、あくまでも自然排便ができる環境を目指している。職員間ではすぐに薬を使用したりするなど短絡的な方法をとらないよう意識の統一を図り、本人のサインを注意深く見守っている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	入浴を拒む方に対しても充分に時間をかけて関わったり、チームプレイで対応を工夫するなどして、それぞれの入居者の希望を優先しながら安全な入浴支援を実施している。	希望を聞き、個別に合った入浴が毎日出来るよう支援し、夜間入浴も対応可能としている。入浴を拒む方には、担当職員を充てたり、タイミングを見ながら、チームプレイでの対応を行っている。浴場は2人介助可能な造りである。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	日中の活動になるべく幅を持たせて生活リズムを整えた上で、夕方からは穏やかな時間を過ごし安眠が出来るように促している。寝付けない方には一緒に話をしたり、飲み物を提供するなどゆったりとした時間提供にも配慮している。また、開所当時からの方針で眠剤を服用している方も出来る限り減らしていく事を心掛け職員間で統一している。現在では、安定剤をはじめ睡眠薬の服用者はいない状態を維持できている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	処方箋を個々のケース記録に整理し、内服の内容や副作用について職員が把握できるようにしている。追加薬があった時や不明な点はそのままにせず必ず看護師と相談する等して本人の状態変化にあわせた対応が出来るようにして連携を強めている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	季節に応じた仕事や年間の行事を通じて、それぞれの入居者様に得意分野での経験や知識を活かしながら活躍する場面設定を多く設けるようにしてコミュニケーションを図りながら実践している。またそれらを終えた際には必ず感謝の言葉を口に出して言うように心掛け直接伝わる反応を確認し今後活かすようにしている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	一人一人の要望に応じて外気に触れ気分転換を図る意味で、日常的に買い物やドライブなどの個別外出を実施している。時に大勢での外出も良い刺激となり得る為、その時々状況に応じて出掛けている。特に最近では、担当の職員が企画立案し、入居者と共に外出して楽しい時間を共有する個別外出に力を入れている。	担当職員が個別に希望を聞き、自宅、墓参り、菓子店等への外出を行っており、ホーム内とは異なる入居者の喜びや表情を見たり、会話ができる等で職員も喜びを感じている。車椅子の方も近くの城山へのお花見等で、極力戸外へ出かけるよう支援している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	入居者の中には、家族の理解のもと小額ではあるがお金を所持している方もいる。社会生活とお金のつながりの中において、過去の記憶を呼び覚ます効果もある為、良い刺激の提供という意味においてトラブルにつながらないように気をつけながら見守りしている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	本人の意向を尊重しつつ代筆や電話の交換を行い随時支援している。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	一人一人が居心地よく過ごせるように季節に応じた飾り付けを入居者と共に作成している。視覚をはじめ五感などの感覚的にも適度な刺激と生活感を組み込みながら日常的に暮らしの場を整えている。	食堂兼共同生活室は照明がまぶしくないようフードを設けている。壁面に、入居者が作成した折り紙や習字等が飾り付けられ、季節感や親しみのある家庭感が感じられる。畳敷きの室、廊下に一休みできるソファの設置で、居心地良く過ごせよう工夫している。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	ホームの中にある程度死角になるちょっとしたスペースを設け、独りになることでほっとするような居心地の良い居場所を確保している。その際に職員が必要以上に介入しすぎないように気をつけ、入居者のストレスの緩和に配慮している		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	移り住みなど環境の変化による不安や影響を最小限に抑えるため、入居時は特に馴染みの物を持参して頂くように本人や家族に働きかけている。家具の配置にも気を配り住み慣れた自宅の部屋の縮図に近づくように心掛けている。	箆笥、ペット、ソファ、記念写真、人形等、入居者が使いなれた家具や馴染みのものが持ち込まれ、家族とも相談しながら配置を工夫している。居室の表札も思い思いに作られている。加湿器も使用している。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	できるできない事を見極め、対象の入居者について職員間で何度も検討し、可能な限り出来る状態に引き戻せるよう取り組んでいる。本人の混乱や失敗を考慮しつつ、まずやってみる気持ちを大切にしている。		